



世
說美少年錄

壹

^ 13
3567
6



由亭翁口授編

近世說美少年錄 冊五

一陽齊豐國畫

文榮堂 精刊 群玉堂

13 3567 6

美少年錄第二輯總論螟蛉詞



博覽羣書尋故典旁搜野史錄新聞講談

盡合三朝拾褒貶咸遵律令文按捺姦邪

尊有道讚揚忠孝削讒人零裁錦繡篇篇

好碎剪冰霜字字真春夏秋冬排景致風

花雪月按時新丁當擊玉敲金字剔透蟠

龍綉鳳紋壯似秋風吹戰壘清如夜雨上

松林助添豪傑英雄氣感激忠臣烈士心

美玉良金思巧匠。高山流水待知音。當場告稟知音者。忙裏偷閒試一聽。自從神代鴻蒙判。生民一治還一亂。政子治世天地。地陂等持累葉綱常變。兩倫島兔往來忙。五行正閏循環換。忠良姦佞本無嘗。上帝分明有成算。

文政己丑年。小滿前二日。杜鵑初鳴朝。書于神田著作堂。

曲亭老人



附ては大約草紙物語の刺入画者てその好むもの者ハ画の巧拙を論ぐて本文は意不違ふと違ふるとを以て其の辨を以て其の画の巧拙を以て其の作者の面目を損傷すのれを以て稀に之故小予ハ画を以て其の来著者物の本に必ひつゝ画稿の之を以て其の画者示して之を以て其の然るを以て其の画の意を以て其の潤色を以て其の動も其の本文の意不違ふるを以て其の壁紙這書の前輯を以て其の挿針山画中の又て其の次る巻の画も其の少くも其の如く又板木師の刊送ハ鑄造も少くも然るを以て其の書肆の之を以て其の校りも果むを以て其の後ハ悔しきものも其の如く其の巻々の心不孰し目あるを以て其の讀むとも備訓を以て其の誤脱を以て其の看送を以て其の燈下の戲墨を以て其の春恋を以て其のあはれを以て其の亦書籍のめを以て其のむくを以て其の捨るを以て其の苦心を以て其の惜しよと前輯の巻毎ハ誤寫も其の補正く其の下第六葉の左る。あまれる紙ハ記すを以て

近世說美少年錄第二輯總目錄十一回已上摠目錄見第一輯首卷

卷第壹

第十回

舊情慕西阿夏起行
遠謀警程福富分贖

卷第貳

第十二回

憂苦難訴泣俟歸帆
繁華易親漫事邀遊

卷第參

第十四回

垂梯橋客婦賣絃歌
侯鯖樓浴人認舊妓

卷第肆

第十五回

苦雨初霽殘花遇春
樂地不空赤繩變繫

卷第伍

第十七回

清蚊釋厄子母還故御
黃門察情艷童留西家

第十八回

校豎說利和季子血
墨吏履勢屠役焚

第十九回

信謔道永誓嬖臣
秘怨尹賢陷香西

第二十回

茂林社惡少見捕
石城叔姪再會

第二十一回

鷹捉山晴賢逐魔
享祿役君臣亂離

第二十二回

鷹捉山晴賢逐魔
享祿役君臣亂離

本編所錄起大永二年壬午至享祿元年戊子歲凡八箇年小說

第二輯總題目完

中納言
兼藤原



溫柔長者

不好言人

惡

權富媼

所鑑

像寶第七
圖左蛇甕臨
寫真說見前
輯卷第五



栗

あ

五

乃

長

乃

美

乃

乃

乃

乃

權富大次郎

幸

確

无

四

郎

高

乃

像寶第八

高國入道永

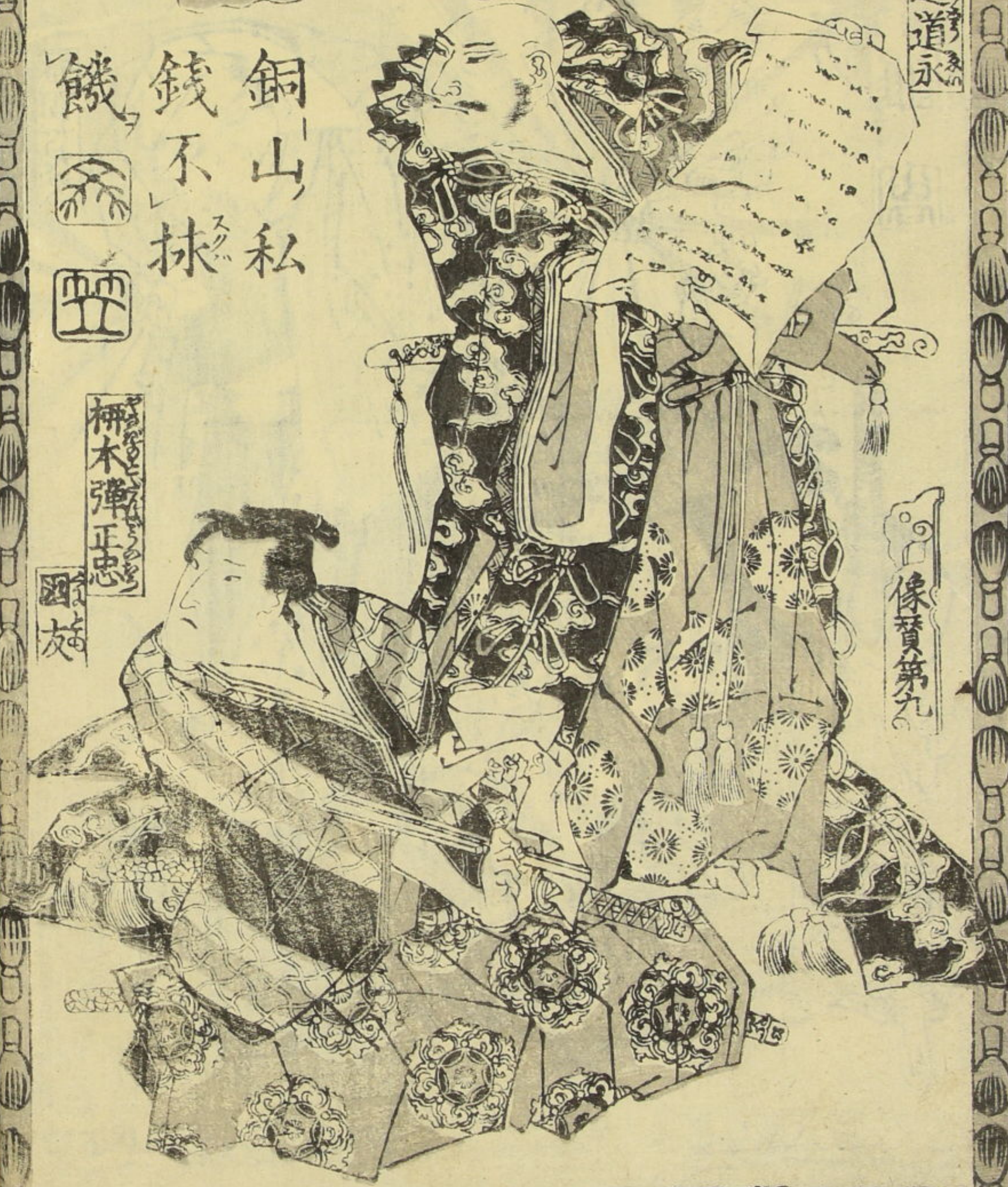
處喜君 殘桃 媿

銅山私 錢不抹 饑



柳木彈正忠 國友

像贊第九



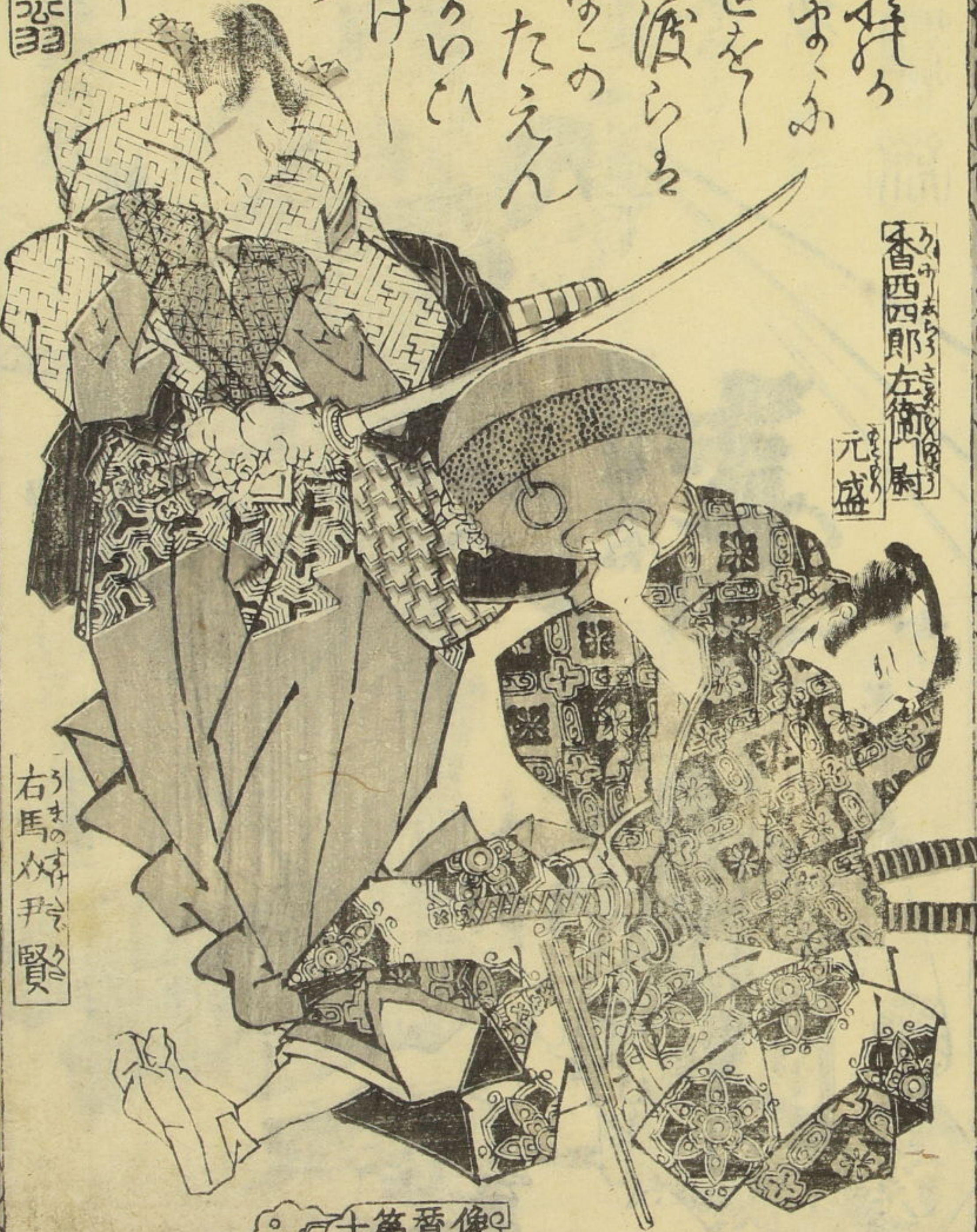
福而翁

は乃 あろ ちの たえん 世を 涙ら

香西四郎左衛門尉 元盛

右馬次 賢

第十像



鳥谷修理大夫
朝熊

像替第十二

造佛
本素
有漏
縁
千重
抛
無功
徳

徳
無功
抛

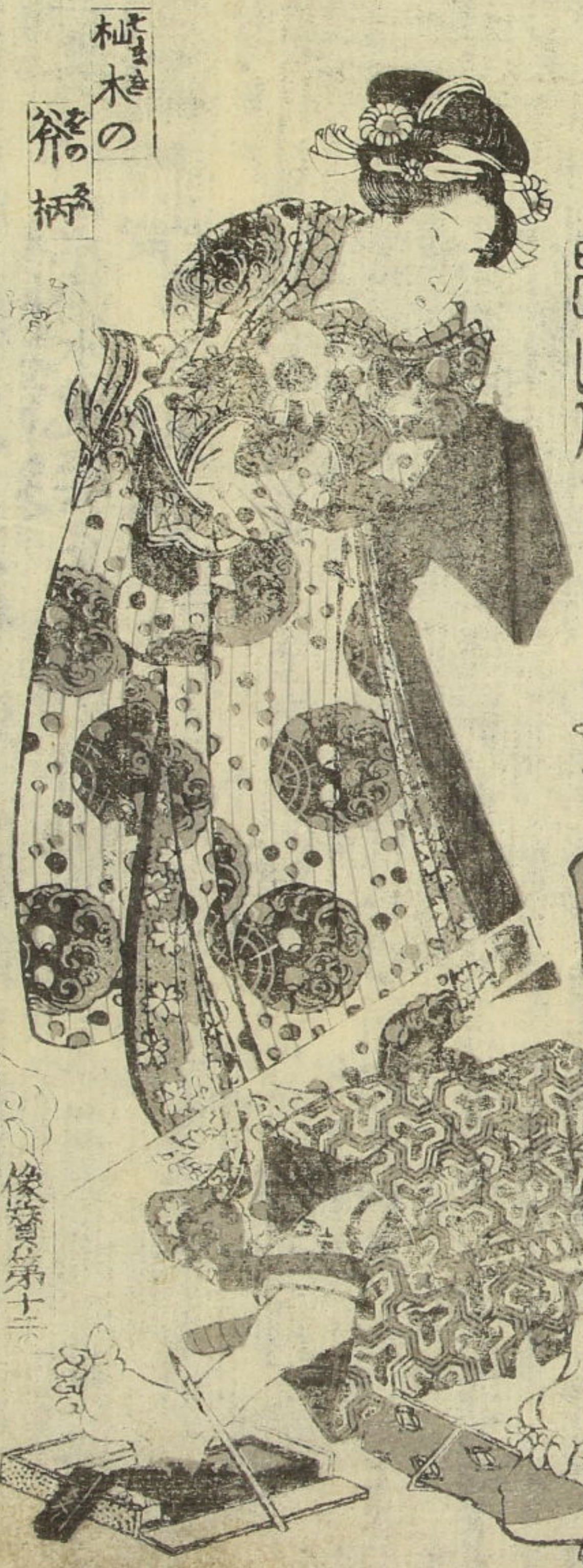
如來菩薩喝食



芥純柄と果と
なまよ柄ぬらむ
松本よりぞふ
思ひあはれむ

思山尺

矢野宗好



松木の
芥柄

像替第十二

上の前輯の誤寫ありを校下に送せし抄録あり左の如し。

第一卷の左の水泊水虎云々と水泊河伯の写し誤る。第二卷の右の俳句あり誤

寫に當徘徊小作。第三卷第三十三行の然れにあり。傍訓の表の誤をされに。第五

卷初下左の八行の誤りありののりとのあり下もの行と同卷。薩埵の埵と誤寫し。薩

隆の音筆邊界之危之疆と字書小をを。埵と同の誤寫同卷。薩埵の埵と誤寫し。薩

薩埵小作。入同卷第十行の獨女の傍訓あり。薩埵の埵と誤寫し。薩埵の埵と誤寫し。

卷十三行の後見の傍訓あり。薩埵の埵と誤寫し。薩埵の埵と誤寫し。校下送一

の餘同卷の右の阿夏夏珠之双の過あり。説示を條め。薩埵の埵と誤寫し。薩埵の埵と誤寫し。

ゆく夏肆月とののり。歲月の違ひあり。ある筆を誤る。作者の不圖の違ひ。捌月の

木偶の妻と子も推して京師と起り。月を真房が周防へ遷り。歲月と取。歲月と取

たの後心のつらさ。制作本の折れ。及ば再刷の日の改正。昔人の書と校を。書と校を

風塵落葉の如し。隨拂介隨てあり。さあめめる文人なる。胸林のぬり。胸林のぬり

近世説美少年録第二輯卷之一

東都 曲亭主人編次

第十一回 舊情西を慕ふ阿夏起行

遠謀程を警言ゆく福富盡を分り

復説福富太夫次への宵阿夏夏珠之双亦を歎待く黄金を愛る五色の玉。来歴と説示。語次小獨子。太夫五が性方もある。さうりありさういひ出せ。

嘆息とて。阿夏妻の厄舎も娘阿鍵も禁め難。涙の間の厄舎戸を隠。阿夏とて。阿夏とて。阿夏とて。阿夏とて。

喃阿夏とて。阿夏とて。阿夏とて。阿夏とて。阿夏とて。阿夏とて。阿夏とて。阿夏とて。

吾見を誉るふあらはれも。大夫五のこの来酒の嗜ま。色も好ま。徳とて。徳とて。徳とて。徳とて。

るりや相応の武夫の技。耽りて活業。懈りより。夢々公の一載勸解。意意見の聽ぬる。追出する。今て。後悔況や吾侪が心の中を。然てと。猜定か。

大夫次のはくごとく安果く噫女中ハ必ス不優て薄命なる人なり。其の鎌倉君を由縁とせしむ。疎遠で過せし人あり。遙々索ひて赴くとも。今更ニ恙あり。然其処を測りて。且今茲に去歲より。寒風ハ一入早う。遠くを雪も降る。下是彼のろく女中の長旅前路と急ぐ後悔ある。春まよひの逗留と。寛中不赴は。身詳の翌相譚ん。要るは身上的話して。人を遣はし。海をせし。噫れ。思正知る。息子の睡けええ。母由も勞れ。をわんをい。まま夜と薄ぬ。そく臥房へ入り。と。赤屯倉の後方。侍婢とえ。東のく。編室の阿客の臥簾と儲て。のた。案内せ。分付。阿百。駒の。夫婦と阿健黄。金の赤く。飲ひて。珠之。急。侍婢引れ。臥房の赴け。却説阿夏。は。這福富の資。返留。程。次の日。赤屯倉阿健。戀。阿夏母子と慰め。放遣。阿夏。心。儻ある。

赤小向れ。鎌倉君。由縁許。ゆんとの。當座の慢語。彼外。所要。其。この京師。馮。親類。も。友。あ。夜の夢。お。立。聖の示現。親子。厄の釋。故。御。宣。今。且。且。春。周防。伴。亦。測。凡。慮。既。所。只。御佛の引接。小。件。奉。不。優。と。あり。尋。思。立。働。あ。ト。夫婦の機。執。赤。屯。倉。の。阿。健。且。暮。坐。邊。不。掖。著。て。辭。敵。ま。た。り。ける。然。程。小。珠。之。以。這。家。の。寄。食。見。る。就。寫。津。川。作。日。高。景。市。と。の。雨。箇。の。総。角。小。對。面。せ。の。朝。より。相。驩。お。と。大。然。也。年。來。深。山。を。孤。屋。小。生。育。て。世。小。人。の。疎。り。小。の。豪。家。の。客。小。り。て。視。小。觸。る。の。耳。小。聽。く。は。珠。う。る。と。い。ま。を。日。毎。小。遊。戲。れ。と。友。垣。を。締。ひ。お。り。と。必。小。山。賊。小。養。れ。る。秘。事。の。後。ま。ま。の。程。小。今。茲。も。冬。の。中。小。の。月。

都も鄙も人の親のその子の為の著袴鮮切を唱へる。社詰の祝言あり富
 るの身有の依と驕る人の習俗を大次郎の舎の豫てより黄金が鮮切に
 準備して京様の衣裳綺羅を盡して裡衣までも流行を言とてさうまの叙
 児珠瑠の櫛とつら京様より購求り物整むとの事あり如之而十五日は
 黄金の裝飾して城隍廟へ参らせ又さる里の家々を巡らせ先景の後
 者さる華を多し人食目覚くはけり。この折にあて大次郎の御宗五色の玉の為
 遠近と奔走する村人ホ軒別餅一盒を贈りて中宿六を酒宴の
 席末に招き多し織布一疋と牽出物をもさるけり。あま一事两用して一
 の比阿夏と案内致し辛苦を勞ふ又この這回黄金が鮮切の祝言を
 との知るさる又誇負の銭ある人の費を教めてさる古又も吝るれと勢利に附下風
 ありさる世の人の情を隣の代賃と數るさる美を先識る稀を愛す

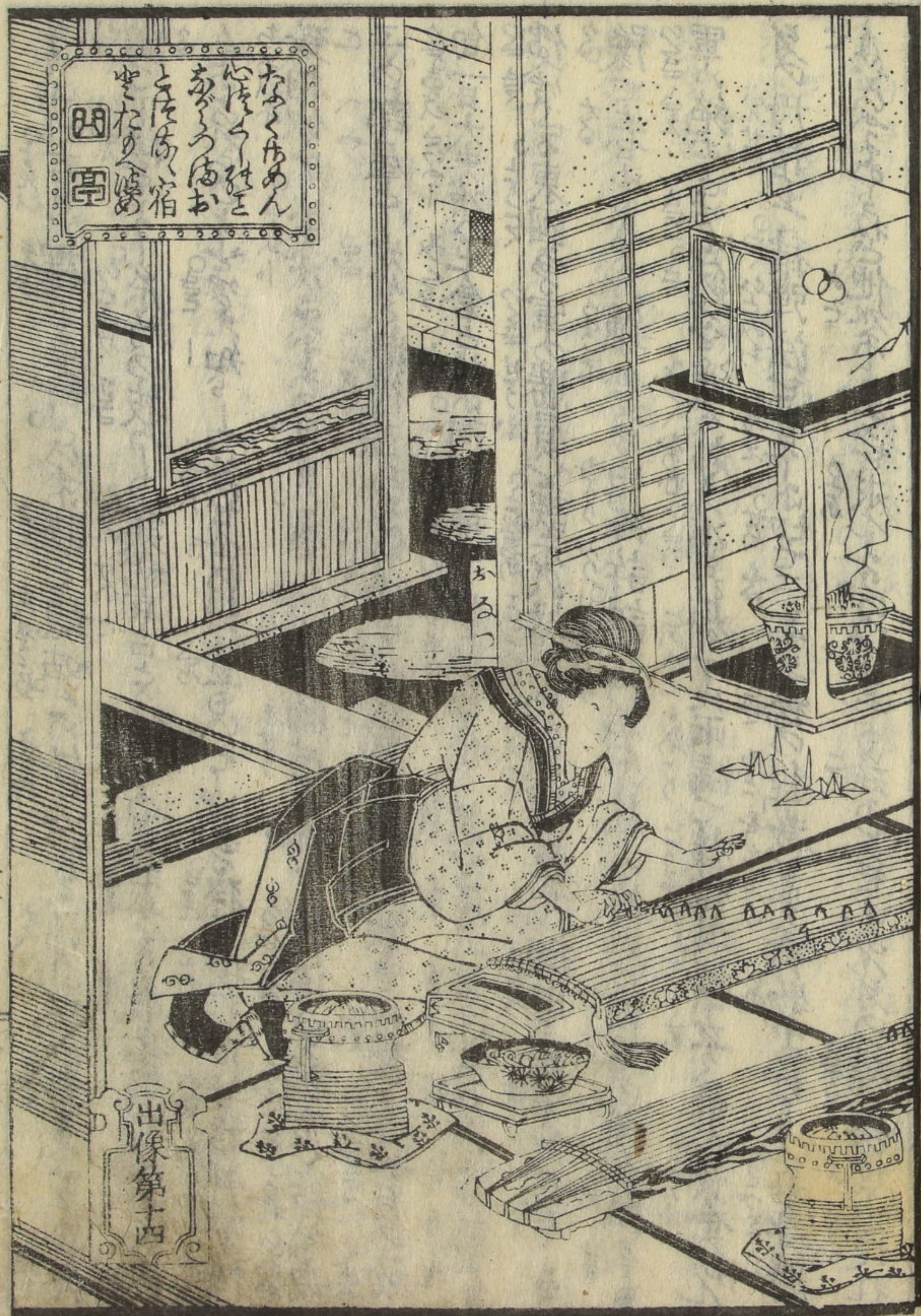
との三稱へり是より先大次郎の屯倉阿健と相譚あり前々酒宴あり
 鄰村の鼓女あり筑紫琴をせり招きよきて自を添へ近曾彼鼓女を
 りくはる技をまののる黄金が為の財を惜まざり物物の整ひさる君の
 酒宴の管絃の準備をのせんむ。年新皇將に相馬に内裡を造り
 時諸司百官を置れ小曆日博士のさるる心地をさるる段の
 らるる。とうち戯れて潜り死回へん舎も咄々とうち笑ひく阿健の何とある
 中ら華洛人の貴賤を遊藝と旨とるれば近比より弄ぶ三弦とあるの
 まら彼処へも流行すとの実支である。あま阿夏女郎も琴技あり
 疎くもあは故郷の京をさるるのみ今召す問ひ。この阿健の有理と心既
 立んとは程阿夏のめとさるる朝化粧してまられば大次郎の舎の
 から坐邊に招き近づく。と云ふと説示。倉卒とさるる必管絃の財

其藝のなるるるとして其黄金が解切の壽紀の客と聚合く賀酒を酌んと欲せ
 願ひその折一曲奏て酒宴の真と添も田舎料理も光と増てあつたの寶
 達もあつた幸ひあつたの多と頼まらるる彼三弦の奏れも琴の大小二面あり
 鼓もあるれ好ま任と出置え美引めと他支もろこ入弁一請求も阿夏
 竹の合笑く宜定は推量せられ如く糸竹の技りの穉時より習ひも久しう捨て
 けりし心のこるれりる頼せめんと黙止があらん紫琴をそとられ寝緒にうたが
 ぬりやせんをそと準備もあつたよまはつてと皆終つて不又示合せらる却説は其の
 時より五合保の村長ハ優得の百姓牧士馬買福富が親類の男も是
 彼木小丸が儲の席は聚合せて前段後段と美味と盡せし御食饌の種々もあつた
 ら下り白鳥の男客あつた大夫次女客中屯倉阿健が薦るる不世二度度
 と廻る程小冬の日も暮果て処陝も点く燈燭の花も亦愛しう時つた

大夫次の席の真中ハ膝を進め袴の裾を左右へひらき扇を扇ふ声あり立て
 諸君送る聚合せめて黄金を祝ひあつた斯間ハ夜飲み及べりいと辱く飲
 一六限のあつたよまはつてと皆終つて不又示合せらる却説は其の
 この地を過る旅の婦人を以て笛置るる糸竹の技の疎らとせしつた其の
 本事と知らねも後蔭の女見ゆも芳うとてとせられ一曲聴せめりとの客皆笑
 坪小入くとの肉あつたよまはつてと皆終つて不又示合せらる却説は其の
 聴え錦の上の花を添る意外の快樂るるをれと促と膝折直くと俟程も阿
 夏ハ屯倉を取らる新衣の衣の被て真のよまはつてと皆終つて不又示合せらる
 安否と語るのいひる愛敬の客も前進の進止の并子の餘風頭れ次女の花ハ
 一れも初機より有あつたよまはつてと皆終つて不又示合せらる却説は其の
 好むまの三穂の浦曲ハ天降りて彼羽衣を松の掛る玉女の果敢と驚あつたの村長

豪農辰牧士亦も猛小貌も更もめても詠る声音と笑れとも應答まら慇懃小苦薩と拜む心地せり當時阿夏後方小措れ筑紫琴と推直しと持柄ハ指の運び細小川の瀬と渡る蟹の歩ミ小彷彿り節奏緩急をの度小稱ひ且祝言の細唱と声妙と歌ひ果て酒盛の間々小京師で流行一柳節と凡音高く歌ひと聴むとあらの熊野道者欲笠と挿る柳の葉と繰返一又ち返まされと席上生醉の呂律廻らぬ管も巻れと雜譚閉口水滂と共小流る感涙を吸揚と答言を阿夏原是歌妓の客小熟る昔の杵束粉挽歌と田舎見の機と執る調子あもまろ琴合りの果又扇拍子は浮きと熱る後の客あら素入同志の膝舞踏大居牛飲狼養肩腹立て献々と教献累る乱中酩奴婢も散動て幾遍とあく腹と抱と笑へとも鶏の毛啼く八声の比小酒醺やと果小る衆客奔一醉去く初て風の起るとも樂喝て衣來る尚已時る幾十思真の席薦の酒は

汚されて臍蠟燭の真影る時小落しけん鹿兒斑毛小焦るわり況庖厨で取らとち推える枕碟小鉢の蓋も留めと林埒放下しと又又るのもろ一貨恃て入ると亦恃と出る自然の勢ひ富る家あらの世ゆも又又の一間話不顯の次の目小大夫次屯倉阿健小の齊一阿夏と勞きとの音曲小提れと答言ると大くさらと中に也倉がいやと又又の凡立見の妙ともあれ程さら小あらんといけてももあらるける現河水の塵も隊去り江の鶴も檐小木はけん声との一節との如此其藝者の京鎌倉の傳言も傳言もあらるももの以て黄金小教と明年ハ八才小の切れ切て小曲子の三四章も習せとうの出しともあらると然小師は一頼れと他事もると辭小携る阿健と共小勸めく己が一人のあらると恃とと也阿夏の微笑と寔小不測のえあらと今茲とあら竹の子又親さらと工もろく杖を駐めとはると中陰とあらるける然とるの女報ひ願へともせま



たかくあん
心はくせ
あまの宿
とほの宿
空たの宿

出像第十四

ほりけれ吉日と擇まのめ。とよ小領と娘姑とを教へ給ひ小侍のまの暦とてうらと置か
 用て下段より糸竹の技のりも寒松百古とてのこたのれおまの教えのひてまふと黄
 余ふあれのよと愛え知らしと教へてのひらまのひてける孫を便れ子に甘ん恩愛情
 致相似たる大夫次又まの日のり。急く阿夏と師匠と稱え乾浄なる福室と彼等母
 子の部屋と定めぬ数待目も弥倍なり却説今茲果敢多暮春如月の初
 旬一日大夫次へ屯倉と共阿夏珠之次と招き茶と薦の菓子と薦の世の風声ふ
 傳へたる東國の軍の勝負と説次語次大夫次がのり師匠なる彼のおん身も
 豫て春ゆもふと鎌倉なる由縁許諾してのれが彼処の戦馬の蹄も荒て今も
 軍の絶せたるも必しと遥々赴く瀬む樹下に雨漏て後悔其外亦たのん黄金おん
 身丹精並に稍弾法と覺し小切て二を三程の程教を受る物もわらん吾身勝
 ぬとふもわぬ他処よりまを求めしうらまのの茲もまをわん身の標致の世も捷れ

たる。着想まのののの再醮の戦いもばの緩急も擇んで身の落着き料りてん
 の説小従ひのひとよ小屯倉も共侶小辭ひとく口説けり阿夏これらうらと腹裏に
 思ふ吾侍の豫て周防の山口とあらん赴きて瀬十郎ゆ小今一とひあて珠之次と遊
 与んとあらん此言れと今又思ふ東のそと西國も亦彼此軍起り之路程難義にわ
 りのせん左ても右ても七八稔音耗絶る陶師今茲春訪ひも妹仗の縁一竭
 まもわん環會小日のまふまのいも時節の至らぬと急が還て禍わらん加以ぬ
 達の斯懇切小苗ゆもと推辨くまの春ゆも情の仇とてままで小盤纏もヨヌク
 ぬとあつ且一兩年あ居て時と俣もまゆめれと尋思と答るやう宜ふと録倉る
 今や便宜の里小侍も且由縁わん人の存亡も料りぬけれ有敷小心進ひのともま
 欲した周防の山口小侍も彼処中珠之次が親も優る一箇の叔父も年来疎
 遠よりその鄙語小親の法會も憑り候下。まふあれも懇切小苗ゆもあは

比く固辞こごころの恩おんを知しる小似こにう娘むすめさるの器用きようる一兩年の程ほどの奥印おくいん可かまは海
 おうせんおんと豫よては朝あさ夕ゆふのあつて用もちひを煩わづらて教しやうをせうけふ未ままに遠とほく別
 れを要もとも本意ほんいをくびざらんや今いま終しまひ申まをして仰おほせよ冬ふゆ終しまりて子こを携たづりよ
 ま求もとむる願ねがひのたゆるを具た珠たま之の父ちちを頼たのまむといふは終しまりて倉くらより大
 夫おとこ次つぎへ幾いく遍へんとまらち領うりやうたう合あ笑わらむおん身みの了り簡かん宜いふよりあまの月初つき午うより
 息いき子こを傳つた燈とう寺じかへて凡たゞ作し景けい市し本ほんと傳つたる習しゆ讀どく書しよと學まなぶ。あの子こハ今
 十じゆ才さいあるを也や。ち年とし比ひよ童どうを遊あそぶとの置かくりる吾われ侘わ小こ任にしぬ終しまりて正
 首くび相あ譚たんし老おいる人の癖くせるれはよふ心こころせうくこの日ひ老おい僕わがを黃わう壁へき山さん傳つた燈とう寺じへ
 遣つたし珠たま之の父ちちを教し育よくの京きやうの趣しゆ云いと住ぢゆう持ぢは憑たのまらうけり。これより大だい夫ふ次つぎの珠たま之の父ちち
 自みづか習しゆの机き硯いんの類るいより実まこと語ご經きやう之の購かう求もとめく准じゆん備びをくも教し歩ほ程ほどは初はつ午ごの日ひあり一
 大だい夫ふ次つぎの珠たま之の父ちちをわく。あつて件けんの寺じ小せう赴しゆ則すなは住ぢゆう持ぢ對たい面めんと束すく脩しゆの沙さ金ごん二に兩りやうを

進しんむ凡たゞ作し景けい市し本ほんと傳つたる教し育よくの事ことのまらま住ぢゆう持ぢの事こと異い議ぎを大だい檀
 那なの事ことのあれ快たく美み引ひく貧ひん道どう豫よりて凡たゞ心こころの及およぶ事こと教し道どうを凡たゞ貴き意い
 休やすむれと心こころを茶ちやと薦せんめ果くわ子こを羞はむく他た事ことを款くわん待たいひたり。ゆは故こ小せう珠たま之の父ちち
 稻い荷か祭まつりの太たい鼓こも打うちた。日本にっぽん意いを消けせし快たらぬ事ことをさあ。凡たゞ作し景けい市し本ほんと傳つたる
 凡たゞ詰じつ朝あさより凡たゞ作し景けい市し本ほんと傳つたる傳つた燈とう寺じへ赴しゆつ住ぢゆう持ぢの事ことを賜たまはる安あん積せき山さん浪なみ速すみ津つの
 歌うたより習しゆひ初はつめけり。阿あ夏げハ是こゝの恩おん義ぎを感かんず。いもまらま實まことをいれて黃わう金ごんを琴しんを誨を
 する。只ただの技わざの事ことを結むす髮かみ化け粧けい何なにれと。黃わう金ごんをう。他たの事こと小せう被ひむ妹い母ぼの事ことをいれせ
 凡たゞこれ終しまりて大だい夫ふ次つぎの倉くら阿あ鍵けんも共とも小せう珠たま之の父ちちを就しゆ昔せき古このう。凡たゞ物ものを惜おしまむ紙しを筆ふでを
 乞こむ。任にして錢せんを取とりて買かいせ。凡たゞ作し景けい市し本ほんと傳つたる景けい市し本ほんと傳つたる春はるより。習しゆひ入いりて。凡たゞ作し景けい市し本ほんと傳つたる
 為なる。師し兄あにも勢せいひ雲うん壤じやうの差さあり。小せう似にて還かへる。珠たま之の父ちちを筆ふでを紙しを凡たゞ貴き意いを終しまりて
 の。日ひ毎まい々々を連つ立たて。傳つた燈とう寺じへ。凡たゞ作し景けい市し本ほんと傳つたる然しか程ほど小せう珠たま之の父ちちの寺じ小せう赴しゆて住ぢゆう持ぢの教しを

受ること。一とむあまのふなる。隨は初の程を慎む。習讀書不実をいれ。れ後ゆふ
 角く息を住持の教訓を物ともせ。凡作景市をその。勤も先が外おく。山小
 遊水小戯れ。已が隨小奉動ふ。住持小報る。のあれも。皆是大檀那。小由縁ある。然
 角ホも。その。罵りも懲りも。あまを。沙弥喝食。中あ。の意を。と。做書の折。小ハル
 形と。その上を。暮々。写せ。と。慶美の。高。点。許。す。の。と。宿。所。の。了。て。婦。の。大。夫。次
 屯倉。阿。夏。ホ。ホ。の。あ。る。べ。と。と。あ。ら。む。と。の。上。達。と。感。と。已。を。折。々。人。の。説。話。の。件。の
 做。書。の。守。り。久。の。答。の。の。る。る。有。如。之。程。小。珠。之。及。の。一。日。凡。作。景。市。ホ。と。傳。燈。寺。に
 庭。小。遊。び。て。潛。安。小。講。小。中。の。五。子。ホ。ハ。何。と。思。ふ。今。戰。國。の。世。小。生。れ。て。多。習。学。問。何。の
 せん。願。ふ。所。の。馬。兵。法。奥。義。を。送。る。極。め。る。遂。小。の。身。の。運。小。衆。と。一。團。一。城。の
 主。の。も。る。不。昔。源。の。牛。孺。丸。ハ。鞍。馬。寺。小。あり。時。夜。を。出。く。彼。山。を。木。石。を。敲。き。て
 自然。小。劍。法。を。煅。煉。さ。る。平。家。と。滅。さ。る。あ。ま。の。世。小。志。氣。あ。り。の。身。い。と。ど。ど。た。右

ど。今。吾。黨。ハ。總。て。二。名。あ。ら。小。遊。戯。れ。て。徒。日。を。送。ん。と。り。思。ふ。武。藝。の。試。敷。と
 共。小。青。雲。の。足。代。よ。る。後。小。悔。か。ん。幾。師。匠。の。あ。ら。む。と。も。一。心。凝。之。懈。ら。む。何
 て。牛。孺。小。劣。る。矣。の。誤。ハ。誰。何。と。其。け。凡。作。景。市。終。ひ。く。あ。ら。微。妙。く。も。の。れ。の。れ
 哉。俺。們。ハ。素。武。士。の。子。言。馬。ハ。家。業。の。も。ら。不。幸。の。親。を。喪。ひ。孤。と。る。一。よ。農
 家。小。人。と。る。を。た。を。と。朽。を。く。思。ひ。よ。の。企。ハ。本。意。小。稱。分。然。と。ハ。准。備。を。ま。け。れ。と。く。山
 樹。を。伐。て。竹。を。斫。く。鎗。と。木。刀。を。製。作。と。試。敷。と。上。目。と。あ。る。の。只。一。日。小。事。だ。と。も。ハ
 山。井。陰。林。の。中。之。方。丈。も。所。化。寮。も。の。間。近。か。ら。住。持。の。法。師。們。も。る。べ。と。の。思
 ひ。も。け。素。素。よ。り。邀。遊。を。常。に。ま。る。然。角。ホ。の。の。る。れ。ハ。机。小。倚。の。稀。る。と。怪。む。の。怪
 る。の。け。や。の。れ。の。と。珠。之。及。小。誰。教。る。の。あ。ら。れ。ど。日。を。あ。の。月。を。思。ふ。と。試。敷。小。懈
 る。と。る。の。れ。の。と。自。得。と。此。彼。迭。小。優。劣。あ。る。中。に。鎗。ハ。凡。作。小。及。ず。の。の。の。敷
 劍。ハ。景。市。提。ま。る。珠。之。及。組。敷。の。の。偶。勝。と。攬。る。と。あ。る。の。の。の。餘。の。技。ハ。染。せ。小

及のどいと朽をくもひしを乳色ゆの頭を獨つらく深念をまらふ吾只深出の孤屋あそ
 養育せられたけれぬ嶮岨の奔走自由且年七ツ八ツの比より半うせも馴と兎をも
 射つ鳥を射く射藝を自得をこれどもあらぬやう箭前を大門のあるところ閑
 羽の廟の内小をゆりう箭前を楓る人の奉納せると折もあつて出とつるあ
 本事もせんまどとあめめら便宜とるがれ凡作ゆも景市ゆもあつてと生言りけ
 表話不題凡作の一日珠之次景市ホと試験の折は相譚やう俺們的這面三年
 武藝心と未女ね一甲斐の大方條の良自得をこれ馬上の術のまご知をまの寺の南る
 山越野の地方あ牧の離駒といまうあつてが翁をいふの牧もあつて他領の牧も合
 養育のいそ牧童ホを誘へく馬も乗習つてあつてとといふ珠之次領をてを究竟の
 計較の錦劔法の士卒の所為のまう馬のあつて誰りよと大將の任も當らんとして
 牧も見てえんとといふも景市推禁めくやと不覚ゆる早りあつて彼野の他領と合保と

ま六俺們的自由あるまを綴吾翁の馬のりとも人の騎るとを禁せられてを成ゆ牧童
 菰屋に在り何でか貸て乗せんやとといふ凡作頭を傾け然りと乗せもあつて何の
 日あつて馬術とよせ我今一つの計あり彼牧の童ホも銭を取ら各酒を飲と相譚
 這事成るやとまらふとと銭をこれせ術もわらぶといふと珠之次はあつてとていふ吾
 侖小任の又箇様々々ふら母とよくあつて銭をゆつてこの誤は誰何と耳は示
 其凡作景市ゆと并鳴らんとその計畧極めく妙よくね氣曉られぬと謀
 合らうら連立をく馳て宿所を還つたその宵珠之次は母のふやうは師の聖の仰
 あり其大文字の復学とせむ唐紙各十枚あつてと大なる筆を準備せざれば
 村あつてとるけん價銀とて來所化達小買取らんといふとせむと怒る忘れと
 宣ひてこのより家公まうととて寔一ゆる欺くを阿夏は知らずを領をて大造を
 復学とせむ二箇のりのまらぬ凡作とのも景市とのもあつて枕草古のるれが今

霄塵あまのつちなる願ねがふてはせん。その價あたいとてその楮毫つちごを買かひて。と向むかへ珠たま之の
 さればと一人別わかれ銀ぎん三兩さんりやうと長なが光みつなるの仰あやせられ。あの美うつくしきものなるか。との阿あ夏なつ
 眉まゆと鬢かみめくると言いふと。住持しゆぢの分付わけひい。と云いふハ論ろんトか。と云いふ久ひさし
 云いふと屯倉とんくらよ告つて九兩くりやうの銀ぎんと云いふと。詰朝あけのあさ三箇さんかんの総あひ角かくホの
 珠たま之の又またいふも。凡つ作まも景市けいしの意い中ちゆう笑わらひ受戴うけたい死して草紙くさしと共とも小袂こたて推包おし
 搔抱かきかかを俱とも宿所しゆくじよと云いふ。傳燈寺でんとうじへ。躬かみて山やま登のぼり。牧まきの趣おもむき
 牧まきの童どう五六名ごろうごにちやうを皆みな口聚くちあひ合あて。汝なんぢ遠とほく。認かれ来きて。あんざらん。俺おれ
 凡つ作ま景市けいし珠たま之の又またいふも。村むらの友ともも。よと交まじり結むすんで。聊折りやく乾かん
 受納うけなせられ。幸さいひら。たのひ。紙かみ小果せうくわを。二兩にりやうの銀ぎんを取とり。けれ。牧まきの童どうホの
 俺おれ何なに等らの徳とくあり。稚子ちごの友ともせ。や加か以もひ。あ。下くだ包たと。辞ことば
 ち。う。さ。ん。を。礼らいする。所ところ要いあ。何事なにことも。美うつくし。仰あやせ。と。可か憐れ

銀ぎんと收とめ。凡つ作まホの亦また鉄てつひ。俺おれ們ら殊ことる。牧まきの馬うまと。賃ちや
 此この。件けんの。牧童まきどうホの一談いつだんよ。及および。美うつくし。引ひて。目め
 兼か押おし。馬うまの。ひ。い。つ。れ。る。も。騎かせ。と。の。躬かみ。二ふた人にん
 一いつが。程ほど。の。わ。び。牧まきの。馬うま。三さん疋ふたと。牽ひき。て。来き。鏡かがみ子こ
 兼か乗のりる。初はつの。程ほど。の。鏡かがみ。小こ附つて。勒りやく。捌はつ。と。散ちる。と。可か
 兼か乗のりる。小こ凡つ作ま景市けいし珠たま之の又またいふも。好このむ。枝えだ
 優う美みな。騎か走しり。日ひ毎まい。小こ邊へん速すみと。争あひ。け。作しやう者しやう
 是これ。先まの。阿あ夏なつ。小こ珠たま之の又またいふも。水みづと。濡ぬせ。幾いく冊さふ
 還かへり。時とき渠ちや。復また学がくの。大おほ文ぶん字じと。と。豫よ
 又また此この。騷さう。金かね。け。の。終しゆう日にち。墨すみと。搦な
 何なにと。答こたへ。と。思おもふ。有あ敷し。不ふ。曾そ安あら。次つぎの。日ひ

黄昏の帰るまゝ。阿夏は遅く候つて復学いふと。三箇の総角辨
 弁一ゆれはと。そのゆれは俺們終日精竭と。親のせし一行書と師の聖小目見せ
 まつり。長老怒り罵りぬ。汝等が懈怠勝る。這書さる何事ぞ。月半
 年中十ヶ月も習ふてぬ。心書てを。是を宿所より去して。福富殿ふえられん。
 汝等よりの吾恥へ。意益と。敦固く皆引裂衣捨せぬ。俺們と。月比日
 あり。懈りしものなれば。機嫌の折れ折れありけん。面目も。と。辨ひと。欺
 々。俱は頭を搔く。阿夏は是を実語と。それを。日屢罵ひ。さる。鉄丸さる。景
 さる。懲めひ。友吟味と。こ。精を出しぬ。といふ。二人の阿唯々々と。答て。馳て。立。系
 面を合し。舌を吐く。庖福のめ。小退り。夕。饌食なる。阿夏は。の。宵珠之。水か
 いける。この趣。あ。下。夫婦。其。報。小。大夫。次。屯。倉。の。ち。笑。ひ。く。立。單。の。の。正。直。る。
 現さる。もの。けん。師。の。長老。の。折。檻。の。炎。灼。き。る。利。方。よ。と。れ。小。懲。る。実。と。入。れ。て。

の。後。の。く。習。ふ。紙。筆。の。の。の。弗。員。ま。も。惜。ら。む。と。心。く。眷。念。せ。る。る。然。程。小
 珠。之。友。小。只。分。釋。の。為。の。日。毎。小。傳。燈。寺。へ。赴。け。ど。も。習。讀。書。の。よ。も。せ。げ。け。も
 亦。早。卒。業。也。亦。早。卒。業。と。い。あり。く。寺。の。を。走。馬。擊。劍。身。を。運。動。せ。り。
 腰。辨。當。と。偈。を。割。篋。の。の。足。を。と。て。嚮。小。謀。の。の。銀。の。の。小。任。く。彼
 此。の。酒。肆。よ。上。り。と。酒。食。と。員。の。の。餘。ま。る。と。山。登。の。牧。へ。を。く。り。て。彼。童。小。に
 取。り。合。合。然。の。珠。之。友。小。使。れ。る。これ。よ。り。珠。之。友。の。軍。の。進。退。と。言。え。と。く
 草。刈。る。童。ま。喚。鳩。め。牧。の。童。と。俱。士。卒。に。擬。ら。る。身。と。凡。作。景。市。の。大。將。小
 擬。へ。馬。小。騎。の。相。つ。れ。洗。小。陣。を。布。儲。く。木。刀。を。挑。三。戦。ひ。追。つ。追。れ。日。を。消。を。
 與。あ。る。の。ゆ。ゆ。け。の。既。小。と。珠。之。友。小。の。件。の。銀。を。酒。食。の。の。送。る。用。果。せ。る。も。是
 飽。こ。と。ま。ら。れ。の。筆。墨。草。紙。の。料。小。と。親。も。老。僕。も。詐。欺。り。て。飲。食。に。費。は。錢。此
 寡。然。亦。あ。り。孫。も。富。る。家。の。癖。な。れ。を。疑。く。禁。身。の。平。只。傳。燈。寺。の。法。師。小

のことを知りて云々と長老は報せしめども住持の慈善と上目とて人の悪を
 いふこと終つたるも況や渠等の総角をこのく福富寅竹え知らせんの大人氣
 年十五六なるもせつら先非を悔死を知るとも知らぬ面色と謀々あ
 のころこれと竊小論ひひけり寔小出家の情状るべしされど這黄檗山傳燈
 寺の本堂の西のふ関帝の廟宇あり禪家小関羽を祀るより昔後漢の普
 静長老玉泉山不在せし時関羽の灵を濟度あゆより唐の高宗の時勤
 州黄梅寺なる五祖弘忍禪師の徒弟第六祖神秀禪師料數行脚して玉泉山
 錫を駐め遂に伽藍を建立して関雲長を祀りて彼よりして彼よりして本
 朝も亦黄檗宗の寺院小関羽の廟を建てること件の故実と傳へる
 神本傳燈師の
 間話休題一日瓜作景市珠之奴の這傳燈寺なる関羽の廟ははる小
 空に碑打ち遊戯れを事果てもる月去らば唐の関小尻うち掛る瓜作後

方を又之と吾子小のいも知らむや抑這関羽との猛者の漢五三國の時蜀漢の
 名将たる初漢の世のいも乱れるを討治んと劉玄德張飛と共に名義を
 桃園に結びても曩小師の長老の奴物語りての大畧を語りて今俺
 們も亦三名年来志同く骨内小異なるも後関羽及びともあること
 老朽や誘然と今あの像前ゆく拙言を立義を結びて久後をも相忘れざる
 異姓の兄弟とあるも欲まこの談小同意せられやといふ景市珠之奴のいづく
 本像とらんく関羽の奴我小も皆ゆれば世惜る當初彼曹操の奴後なる影も
 る蜀と佐けく只義勇の誇り一終小呉人小謀をて縛首を刺されぬ
 事これのめれ俺們三名義を結びて善惡共小辞するも苦樂を等し
 ことら後とも馮心ぬん一味合體勿論といふ瓜作奴びく今ふ一月一日
 上の先小生れと兄とせんと且その年歳を諮る瓜作と珠之奴の時十二に

凡作の秋生れ珠之次、冬生れりとの又景市の一歳後れ、今茲より一なるは
凡作則配判して然らんぬれは第一位の兄る也。つぎ次は珠とのよとの次は景市
との景市頭と掉く何ぞ年歳の三少をてせむ百歳の公羽でも愚心ありの
い愚心先々の像前中々大刀敷の勝負をて兄と撤以弟と倡る甲しを定む
下との珠之次領たぐの設宴小介と。され鎗も大刀敷も皆是士卒の所
為るは勝とのよとも兄と徳る且あの処の本堂も所化寮も遠く松大刀音を
皆外もして福其処不起りせんえあまの廟内小奉納の弓矢前も弓矢前も是大
將の兵具されいそあれ武士るのよとせむらうとのよあもをせむとのひくは
廟内小進み入の柱小推乃中本登りて掛らう矢前も取命と云く左右小扱と
兄弟達よはる今這前而的を立く誰ゆもあれよく射るのよ第一の兄とせん
然るとは物音皆えはれ彼以便宜の所行きの設小後ひひひとのれて凡作

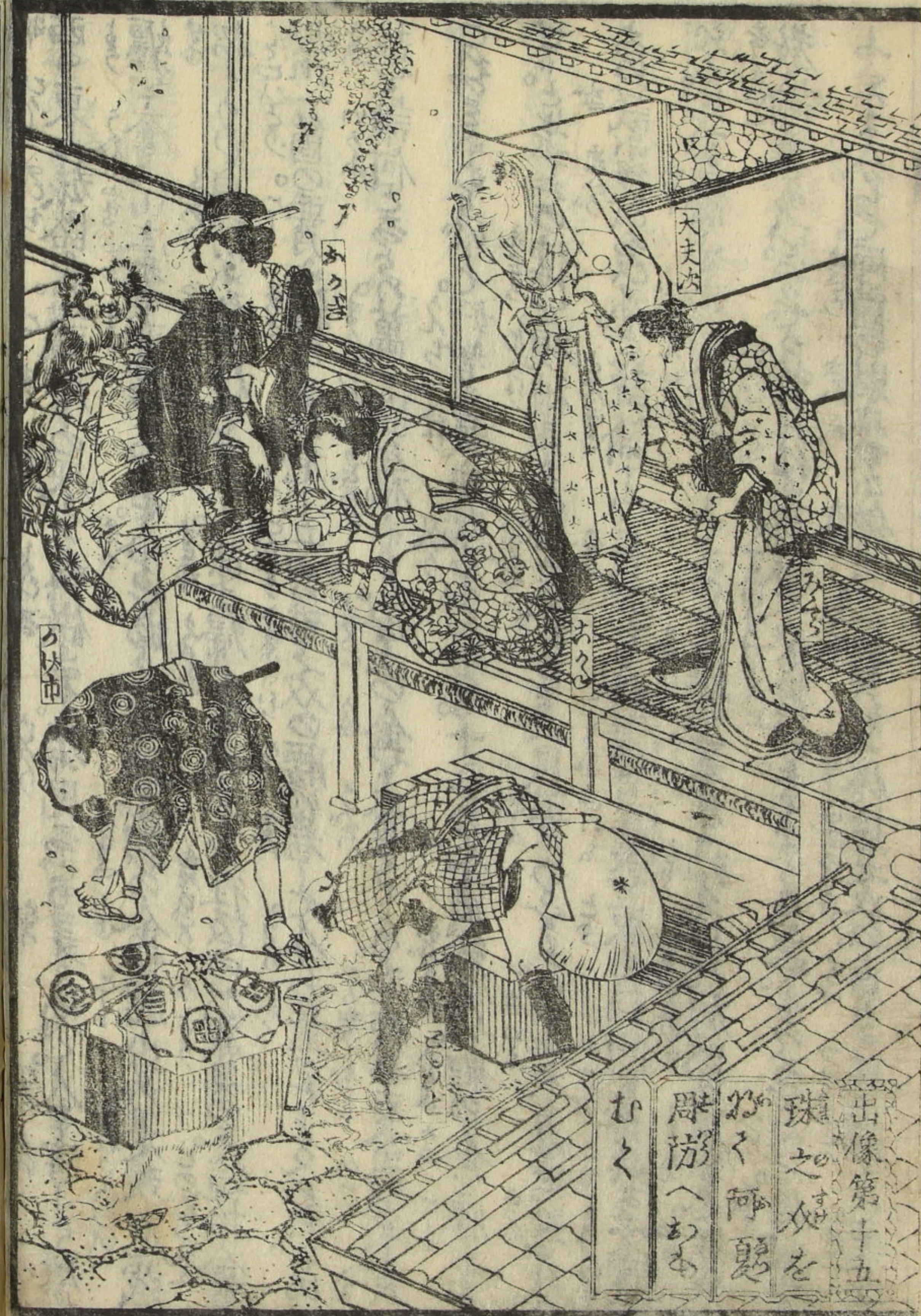
景市の頭と播多、苦笑ひく。そのよをいよけれも俺們はまも射るとのよ音
をのりゆとせせや。そのよ珠之次其介と笑く弓矢前小疎は大将の器と云く然
る本事をえに死むを折争ひあるとい辭をて託ら。頃六如月の下流るはれば飯
正後れて天飛雁はあると投て来はる珠之次倍と膽で今彼雁の言る中ゆ
一隻落しとるさせんむといよりそむ弓小箭前刺を仰さる小彎固も遣も過ぎと
鼓其寛差のて一隻の雁の胸より背へ縫留られて弦音と共に地上より着羽と墜そ
け。今この緯の為体小凡作も景市も驚愕感下舌を巻たぐ兩人齊一額をつ死
俺們は足らされば死身の射藝を捷れとがと一とあひひもけ。怒小長短を論
せ正を悔られはより兄と下風小立て志を盡費べとのよを珠之次ゆの心あつた
分小過る心もとるはとあう。約束あれは辞する由る。よく準備をあらへとのよ兩人
あつた。凡作の遽く身を起し走る。隕る雁を引提来る小既りて死す。

よと庄見のつひに何とやらん情とあらぬは似れども珠之友が親類とて肩の叔父より
 外はなほはるるこの春西之夕夢のふるる心ありと頻りもあまき欲するの道祖の神え
 誂らばあふ秋一と彼地赴きて叔父は對面をくらふ時宜し依り立ちてゆきひ
 御庇小預のあつと定めぬがや枉く放ち遣きや育此のあ情をんと辭と盡
 ちてじざれ大夫次屯倉阿健ま今ゆふ禁めんと考らん虫力及金貫金あふ丹
 精中く奥印可まてはるうと教えんと由り首途の準備と考ふと考ふに
 美引の阿夏はぬり勢にて珠之友も如此々と告て起行と急なり既に其の
 志首途と定めたる日大夫次の聊送行の酒食を儲けて阿夏と珠之友と出居の
 一室を招きあはせて屯倉阿健黄金等と俱に別の不意の勸め久後はまも譚ひて
 尉あけ誂らば大夫次がいきや宜し不測の値偶より苟且る満四歳外あるを
 交参ひハ過世ありとのまき下況黄金の糸竹の技と教られて都のまきを會

得るる全かん身の次員に依れ凍が為小師の弟子と年を累り親を今ゆ歎
 たりままは別を惜む凍が心は推量せられん知らる如く大夫五が在処今に
 知る由もる世も人々とあ絶て又のあゆまも心當りせられも然りとせ世継の
 りを眷念せざるああ黄金も今茲の十一のゆるる四年俟つて招塔せんと
 思ふる凡作も景市のみる類の流るれ凍があるとも農家とると死性あ
 らるる居けとたよもあれるはあ優まぐああ芳れあ身の息子の眉目美く
 女子小してあ欲し傷買るれ是も亦農家と相応のねと年来黄金と
 中より童男童女の差別を遊敵であけれ屯倉阿健と商量あつての貴
 金と兄弟あつて金を取替はるる後々もも憑めんとあ屯倉の共伴幼穉は
 時の妹と使の縁とあ結びて送る年長人成て外は優華ののあ未
 遂とあ世のあその類ああまて兄公と倡妹と喚入と成る後々も障り

あつとよよとよとよの阿健も正音の良人少妻と妹と呼ぶ。即女弟の擬へる親よ
 由る故と欲波の然らば夫婦と妹と姉と妹の義ありんか。あれはよもめは
 同胞もまた黄堂が為の後々まとの背盾の頼もとの所は信りとの立息をなす
 とぞ。論も人の誠も阿夏の親を改め。数も足る珠之文を然まふはれ
 ん慈愛の辱さ。翌より別れを山海万里を隔るとも。一丁結び好む。信り
 まもものあ宿所。信り心地のまもゆれ珠よ。虎々外視をせ。今の仰を
 志す。おのむ。とよよ。領く珠之文の現々然る。まももの物中。まももの
 黙り。大夫次の女兒を呼ぶ。阿夏女郎即坐お忘せれ。の甲斐あり満足
 や。阿健の無事をいふ。阿健のある。恥て黄金と珠之文の品。不盡と酌
 しく共侶。久後のけを頼げ。且くま。大夫次の準備の金拾両をとり。紙を載
 これを阿夏の贈り。まももの最些。まももの進り。まももの實は。謂り。

西も東も旅路中。護摩の灰と喚做さ。騙見るも。入を害し。盤
 纏と本尊。山家も亦。まももの思ふ。親の金と腰。是。危哉
 招く。周防。便利。速。歸。まももの。路。這。拾。金
 母。一箇の。要。危。五。兩。珠。之。文。の。腰。巻。と。分。ち。置。て。下。め。れ。そ。の
 故。誰。何。と。ま。一。萬。一。路。福。あり。母。の。金。と。太。尊。と。も。五。兩。の。金。と。残。り。只
 これ。まももの。奸。智。の。長。才。騙。見。と。も。十五。足。る。総。角。の。金。と。腰。を
 せ。と。よ。その。懐。を。視。被。さ。る。必。定。まももの。思。案。あり。財。囊。も。進。る。
 あの。議。の。後。ひ。ひ。と。説。論。し。長。才。の。纏。要。取。ま。れ。阿。夏。の。共。受。戴
 ぞ。思。は。優。る。御。親。切。の。系。と。まももの。實。は。旅。路。の。用。心。を。送。る
 教。諭。まももの。背。に。付。て。珠。之。文。の。物。を。まももの。付。て。件。金
 まももの。分。ち。と。兩。箇。の。財。囊。小。飲。り。一。箇。の。珠。之。文。の。膚。を。著。纏。り。と。送。る



一箇の財盡す。其身の懐を扱めし。大夫次うちを。それで。息子も。符の。
 ぶ。懐扱く人。まを。要譚。且言果。屯倉。凡作。何処。景市。
 更。年来。珠之。俗。習朋。輩。遊。敵。の。別。の。惜。
 圓居。加。物。食。せ。ん。と。屯倉。の。鳴。と。婢。の。云。と。の。凡。作。
 と。景市。召。取。り。然。程。凡。作。景市。の。珠。之。母。と。共。遠。く。周防。へ。
 夕。日。の。別。を。惜。し。是。首。を。立。彼。首。取。合。す。の。耳。を。今。の。團。坐。
 招。れ。本。意。の。と。小。の。下。夫。婦。の。目。前。を。更。改。り。酒。膳。の。飲。食。を。
 ろ。任。せ。の。難。と。く。痲。痺。を。捨。の。人。の。背。を。指。し。珠。之。と。言。
 目。注。ぐ。も。果。長。坐。殆。困。と。長。閑。日。影。此。彼。の。此。譚。は。時。移。り。
 黄。昏。の。阿。夏。の。屢。不。言。と。辞。と。珠。之。と。共。侶。の。遠。退。を。首。途。の
 物。の。集。用。意。の。更。劇。と。の。夜。を。果。敢。なく。曉。け。り。前。路。の。豫。も。大。夫。

指揮。陸。の。新。関。の。障。あ。ん。水。行。を。と。定。め。一。箇。の。小。厨。の。浪。速。の
 浦。を。送。れ。と。これ。の。准。備。も。と。り。又。凡。作。と。景市。の。父。礼。知。を。送。ら。ん。と。
 共。侶。の。起。ぬ。食。共。侶。の。朝。出。立。の。著。る。も。心。の。共。り。死。と。し。も。黄。
 金。も。未。明。の。臥。房。を。と。り。大。父。大。母。の。坐。邊。に。登。時。阿。夏。珠。之。の。行。甚。を。
 へ。夫。婦。阿。健。母。子。の。餘。年。來。親。り。け。り。奴。婢。の。別。を。生。口。島。に。
 離。比。草。鞋。と。笠。よ。と。遠。く。送。入。を。後。と。立。歩。折。戸。口。の。凡。作。も。景市。も。身
 装。と。俵。と。又。縁。頼。の。何。と。の。盡。く。大。夫。次。屯。倉。阿。健。其。金。の。奴。婢。居
 又。皆。再。會。と。契。り。目。送。る。人。も。の。共。名。残。を。棲。む。有。敵。の。春。の。山
 里。を。花。の。宿。と。心。地。と。一。嘆。息。を。け。り。畢。竟。阿。夏。珠。之。の。亦。が。遠。く
 周防。へ。又。甚。麼。多。話。説。の。あ。ら。と。次。の。卷。の。解。分。を。聴。ひ。

近世説美少年録第二輯卷之一終

